

P1-154 血清クラミジア抗体陽性不妊患者の卵管通過性異常と妊娠率の検討

英ウイメンズクリニック

苔口昭次, 松永雅美, 後藤 栄, 姫野清子, 棚田省三, 塩谷雅英

【目的】クラミジア(以下CL)感染は不妊症の原因となることが知られている。そこで、CL抗体陽性例においてIgA, IgGクラス別に卵管通過性および予後を検討した。【方法】対象は2005年4月から2年間でCL抗体(EIA法)陽性患者のうち、子宮卵管造影(HSG)を実施した242例である。平均年齢32.8歳、平均不妊期間2年2カ月、CL抗体IgA(+), IgG(-)(以下A群)35例, IgA(+), IgG(+)(AG群)111例, IgA(-), IgG(+)(G群)96例である。【成績】CL抗原陽性率はA群0%(0/35), AG群11.7%(13/111), G群1.0%(1/96)。一般不妊治療における妊娠率はA群54.3%, AG群33.3%, G群27.1%:(A-AG群間: $p < 0.05$, A-G群間: $P < 0.01$)。流産率は、A群15.8%(3/19), AG群24.3%(9/37), G群7.7%(2/26)。子宮外妊娠はA群1例(2.8%), AG群0例(0%), G群2例(7.7%)であった。HSGで異常を認めた症例の割合は、A群で40.0%, AG群では68.5%, G群75.0%であった。両側卵管閉塞はA群0%(0/35), AG群23.4%(26/111), G群16.6%(16/96)、卵管水腫はA群0%, AG群12.6%, G群13.5%に認められた。卵管鏡下卵管形成術(FT)を実施した35例での手術成功率および妊娠率はそれぞれA群で100%(3/3), 40.0%(2/5), AG群で42.9%(3/7), 28.6%(4/14), G群13.3%(2/15), 12.5%(2/16)であった。【結論】CL抗体陽性例では卵管通過性異常が高い頻度で認められた。不妊原因検索の一貫としてCL抗体検査は重要である事が確認された。特にIgG陽性例では高率に卵管通過性異常がみられ、かつFTを含めた一般不妊治療における妊娠率は低かった。以上よりIgG陽性例は、IgA単独陽性例に比較し卵管病変が進行している可能性が示唆され、積極的な治療が必要と考えられた。

P1-155 LAMP法による性器ヘルペスの迅速診断

帝京大溝口病院

川名 尚, 大貫裕子, 松見泰宇, 村田照夫, 西井 修

【目的】性器ヘルペスの診断には病原診断法が必須であるが、従来感度・特異度に優れしかも迅速に診断できる方法がなかった。今回新しい遺伝子増幅法であるLAMP法(Loop-mediated isothermal amplification)を用いて性器ヘルペスの診断における精度をウイルス分離培養法と比較し、その有用性を検討した。【方法】臨床検体:単純ヘルペスウイルス(HSV)を分離して性器ヘルペスと診断した患者16名の発症時と治癒後に外陰または子宮頸管を綿棒にて擦過し精製水に浸洗した107検体を用いた。同時に分離培養法の検体を採取しR-66細胞を用いて培養した。LAMP法:検体を型特異的プライマー、DNA増幅試薬キットと混ぜ65°C、80~120分反応後濁度測定装置LA-200を用いて濁度を測定し0.1以上を陽性とした。新鮮分離株:HSV-1 20株、HSV-2 21株を用いた。【成績】(1)新鮮分離株41株は、全て型特異的に検出できた。(2)臨床検体:HSV-1感染症例では、培養陽性7検体は全て型特異的に陽性となった。培養陰性100検体のうち1検体がLAMP法陽性となった。HSV-2感染症例では、培養陽性17検体中15検体が陽性となった。培養陰性の90検体は全てLAMP法陰性であった。【結論】本プライマーを用いたLAMP法は、感度・特異度共に培養法と同等であり、しかも2時間以内に診断できるので性器ヘルペスの迅速病原診断法として有用である。なお、本研究は施設内の倫理委員会の承認を得ている。

P1-156 卵管障害とクラミジアHSP60抗体価との相関についての検討

帝京大溝口病院¹, 東京大²松見泰宇¹, 田中誠治², 川名 尚¹, 佐渡島陽子¹, 大貫裕子¹, 竹村由里¹, 村田照夫¹, 武谷雄二², 西井 修¹

【目的】クラミジアトラコマティス(CT)感染により誘導されるheat shock protein(cHSP60)を抗原とする自己免疫的な機序の卵管障害に対する関与について検討するため、CT抗体価、感染時期の指標であるAvidity Index(AI)および卵管障害の程度とcHSP60抗体価との相関を検討した。【方法】当科不妊外来にて腹腔鏡検査を施行したCT抗体陽性患者のうち、手術既往や子宮内膜症などを除外した36症例72卵管を対象とした。インフォームドコンセントを得た上でこれらの症例のcHSP60抗体価とCTIgG抗体価、IgA抗体価、AI、クラミジアニューモニエ抗体価および卵管障害の程度との相関を調べた。卵管障害は卵管閉塞の有無と卵管癒着の程度とに分け、卵管癒着の評価はrevised ASRMの癒着スコアを用いて、癒着なし(0点)、軽度癒着(2点以下)、高度癒着(4点以上)の3群に分けた。【成績】36症例をcHSP60抗体価(cut off index)により3群(各群n=12:A群:0.5±0.2, B群:1.7±0.3, C群:4.3±1.2)に層別し解析した。CTIgA抗体価はC群で有意に高値を示した(A群:1.5±1.1, B群:2.0±1.6, C群:5.5±3.4)が、その他の因子は3群間に有意差を認めなかった。卵管障害に関しては、疎通性を認めかつ癒着スコア2点以下の症例数はA群:10/12例, B群:8/12例, C群:1/12例とC群で有意に少なかった。【結論】cHSP60抗体価がCTIgA抗体価および卵管障害の程度と有意な相関を認めたことから、活動性感染の程度によりcHSP60が誘導され、卵管を障害している可能性が示唆された。また、AIと相関を認めないことから感染時期だけで卵管障害の程度は推測できないことが示唆された。